

新編
國語讀本
尋常小學校
兒童用
卷七



圖書 和圖書 遡



福岡教育大学蔵書

T1A3

10

Ko97j

小山左文二合著
武島又次郎

新編 國語讀本 尋常小學校 兒童用

東京 株式會社普及舎

新編 國語讀本 尋常小學校 卷七 目次

第一課	三種の神器	一
第二課	霧島山	四
第三課	いちごの花 (一)	八
第四課	いちごの花 (二)	一
第五課	織物ト焼物	一
第六課	仕立物をさいそくす	十六
第七課	受取	十九
第八課	オモナル國産	二十二
第九課	横濱	二十六
第十課	てんかのいとへい	二十九
第十一課	京都	三十四
第十二課	坂上の田村麻呂	三十七
		四十

第十三課	にじ	四十四
第十四課	カミナリヨケ	四十六
第十五課	水のゆくへ	五十
第十六課	めくらむすめの裁縫	五十四
第十七課	金剛石 <small>コンゴウシ</small> の御うた	五十七
第十八課	鶉越 <small>ウツリゴ</small> のさか落し	五十九
第十九課	神戸牛	六十三
第二十課	養生をすすむ	六十六
第二十一課	日本三景	六十八
第二十二課	隣國	七十三
第二十三課	もーこ来る	七十七
第二十四課	軍艦ト砲臺	八十三
第二十五課	朝日のみはた	八十六

新編 國語讀本 尋常小學校兒童用 卷七

第一課 三種の神器

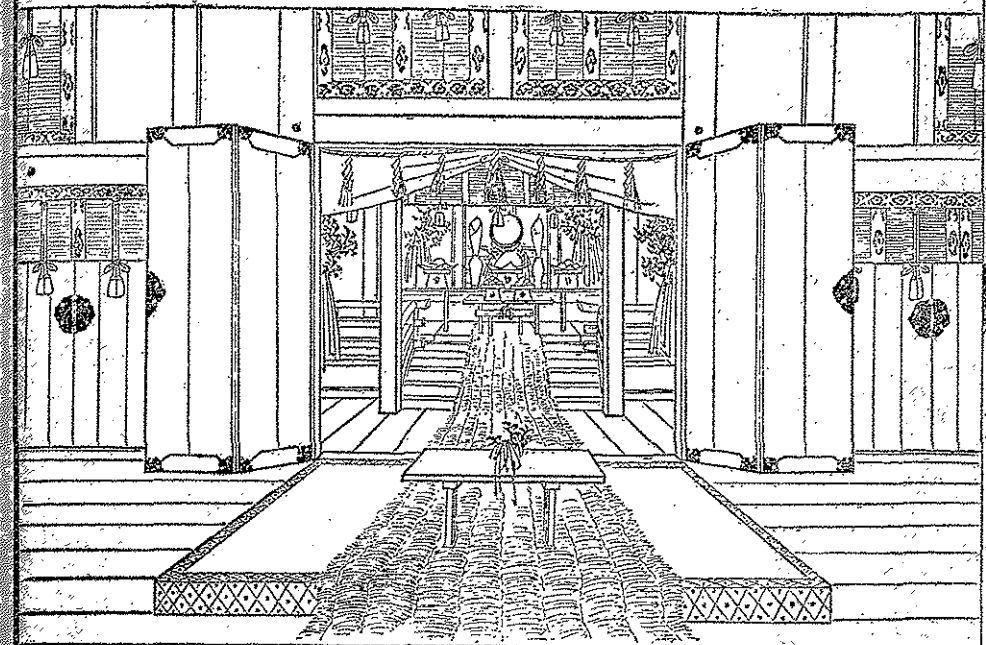
鏡 劍

三種の神器と申し奉るは、やた鏡、草なぎの劍、および、やさかにの曲玉マガタマの御事にして、わが國にて、もつともたふとき、かんだからなり。

このかんだからは、はじめ、天照大神の持たせたまひしものなるが、御孫ににぎ

孫

給



の尊ミコのこの國にくだ
らせ給ふ時、天の下を
治め給ふ大君の持た
せらるべきみしるし
として、大神の御手
づから授け給ひしも
のなり。

ゆゑに、代々の

天皇は御位につかせらるる時、かならず、こ
受のかんだからをゆづり受けさせ給ふ。

今は御鏡を伊勢の内宮に、御劍を尾張の
熱田アツタ神宮にまつり奉り、宮中なる賢所カキヨドロには、
御うつしの御鏡と、御劍とをまつり奉れり。
側やさかにの曲玉は、つねに御側をはなし給
はずとうけたまはる。

御劍はじめ、天のむらくもの劍と申し

しが、日本武尊の、駿河^{スルガ}にて草をなぎ給ひて
より、今は、名を、草なぎの劍とよび奉るなり。

第二課 霧島山

峰^{キリシマ}霧島山ハ、日向ノ國ニアツテ、東ノ峰ト西
ノ峰ニワカレテ居ル。

頂^ミ西ノ峰ハ、火山デアアル。ソノ頂カラ出ル烟
ハ、空ニタチノボツテ、トホクカラ見ルト、大
キナ炭ガマノケムリカトオモハレル。

穴



峰ノ頂ニハ、サシワ
タシ、數百間バカリノ
大キナクボミガアル。
ソノクボミノ中ホド
ニハ、深サガイクラト
モシレナイ穴ガアル。
烟ハ、ミナ、コノ穴ノ中
カラ出ル。

東ノ峰ハ世ニ名高イ高千穂ノ峰ニ
降ニギノ尊ノ天降ラレタ處デアル。ソノ頂ニ
ハ、天ノサカホコガ立ツテ居ル。
高千穂ノ峰ヲクダルト、都城トイフ町ガ
アル。ソノ町ツヅキノ宮丸トイフ村ニハ、古
ノ高千穂ノ宮ノ跡ガアル。神武天皇様ハ、
コノ御宮デオ生レナサレタトイフコトデ
アル。

レンシユ―第一

ワガ國ニハ、火山ガハナハダ多イ。中デモ名高イノハ、
日向ノ霧島山、ヒゴノアツ山、シナノノアサマ山ナド
デアル。コレ等ノ山ハ、ミナ、峰ノ頂カラ、タエズ烟ヲハ
イテ居ル。

ヤタ鏡、草ナギノ劍、オヨビ、ヤサカニノ曲玉ヲ、三種ノ
神器ト申シ奉ル。

三種ノ神器ハ、天照大神ノ御手ヅカラ、御孫ニニ
ギノ尊ニ授ケ給ヒシカンダカラナリ。

第三課

いちごの花(一)

わらびのかげに、白いいちごの花があつた。わらびが大を―はびこつて居たので、いちごはまるで、日の光を見ることが出来なかつた。それで、いちごは「何ゆゑ私はこんな暗いさびしい處に生れたのであらうか。あつまらない」と、毎日、かなしがつて居た。ところが、ある日、わらびは、かまでかられ

てしまった。

珍しい日光は、いちごの上にさして来て、いちごさん、私は、あなたと遊びたくて来ました。私は、あなたのよ―なおとなしいおかたと遊ぶのが、すきで



あります。これからは毎日、遊びにまゐりませう。」といった。

晩

ある夜、ほたるが来て、「いちごさん、今晚は、おや、ようおいでなさいました。ほたるさん、まあ聞いて下さい。このごろは、毎日、日光様が遊びに来て、深切にして下さるので、私は、何よりもうれしう思ひます。」

「それはよいことであります。しかし、あの

お方は、大それた旅ずきだから、毎日、きつと、お出でなさると思ひなさいますな。」

直

「いや、あのお方は、正直でありますから、うそなどは、おいひなさいません。」

「さうかもしれません。私は、お月様とは、こないだ、あのお方とは、つき合ひませんから、實は、よくしらないのであります。」

實

第四課

いちごの花 (三)

あくる朝いちごが目をさますと日光は
どうしたか、かげも見せない。今日は、お出が
ない。どうしたのであらうか。」

理

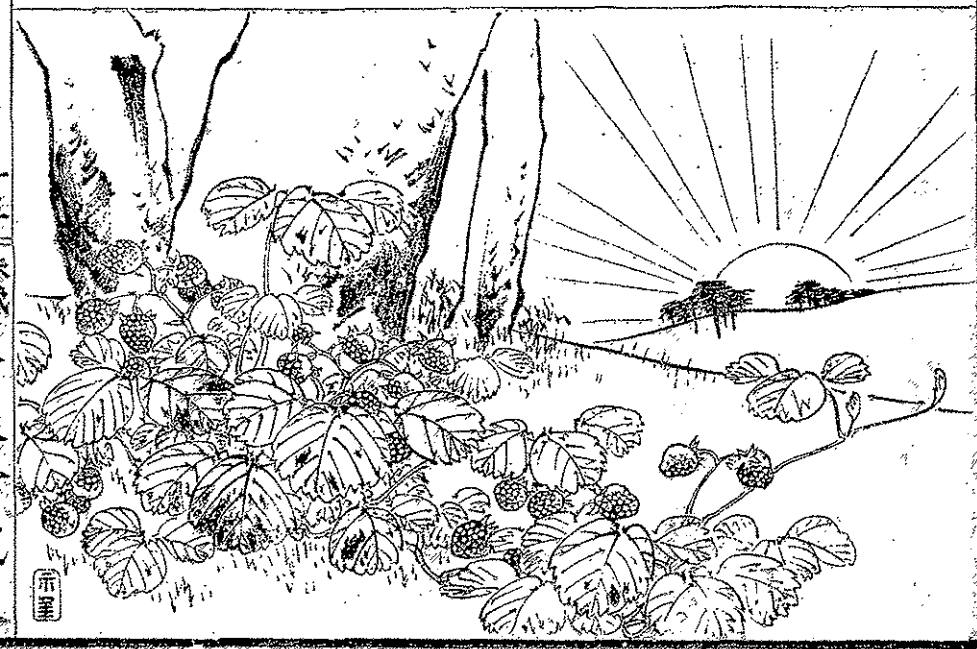
来ないのも道理で、雲が日光をさつぎつ
て居たのである。

まもなく、雲をおしのけて、いつもの通り、
日光が遊びに来た。

「いちごさん、私は早く来たいと思ったが、

大ぜいの雲めが道を
ふさいで、私を通さな
かったゆゑ、おそくな
ったのであります。」

その後、毎日、日光が
遊びに来て、いろいろ
と、深切に、いちごのせ
わをした。そこで、前に



顔は、小さい青い顔をして、病身らしかったい
ちごも、今は、紅色の玉のようなうつくしい
からだとなった。

陽 日光はある時、いちごさん、私は、太陽様の
御使であります。太陽様は、あんな遠い處に
お住ひなされて居ても、よく、あなたがたの
事をお氣にかけられて、あなたがたが、はや
く、ただつように、毎日、骨を、つて下さるの

であります。とをしへた。

そこで、いちごは、太陽のありがたいこと
をしつて、いよいよ、日光としたしくなった。

レンシユー 第二

イチゴハ、野原ヤ、ミチノカタハラナドニ生ズルモノ
ナリ。春ノスエニ、白キ花ヲ開キ、夏ノハジメニ、紅色ノ
ミラムスブ。ソノ形ハ、桑ノミニニテ、味アマシ。ヘビイ
チゴニハ、ドクアルユエ、食フベカラズ。

第五課 織物ト燒物

絹 麻 布

織物ニハ、モメン物・毛織物・絹物・麻布ナドノ種類アリ。イヅレモ、オモニ、衣服ヲ製スルニ用ヰラル。

羊

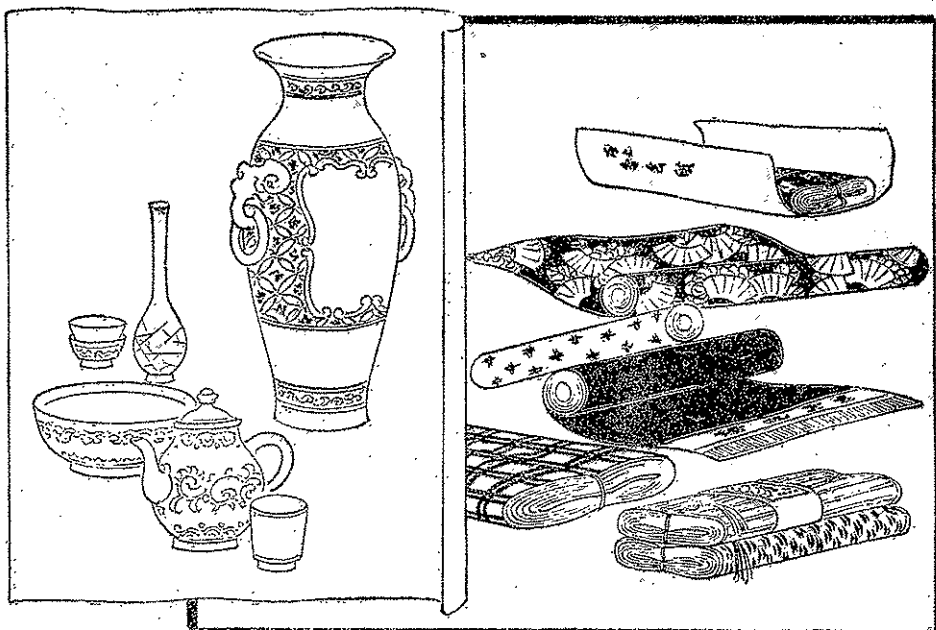
毛織物ハ、多ク、羊ノ毛ニテ織ル。冬ノ衣服ニヨロシ。麻布ハ、麻ニテ織リ、上布ハ、カラムシニテ織ル。トモニ、夏ノ衣服ニヨロシ。絹物ハ、蠶ノ絲ニテ織リ、モットモウツクシクシ

綿 價

テ、アタヒ、モットモタカシ。モメン物ハ、綿ニテ織リ、價、モットモヤスシ。常ノ衣服トスルニハ、木綿物ニ勝ルモノナシ。

絹物ニ名高キハ、京

都・越前・上野・下野等ナ



全リ木綿物ハ、全國、ミナ産スレドモ、コトニ河
内^チ薩摩^{サマ}阿波^ア等ヨリ多ク出デ、麻布ハ、奈良^{ナラ}晒^{ザラシ}
近江^{アミ}晒^{ザラシ}ナド、モットモ名高シ。上布ハ、越後ヤ、
薩摩ヨリ多ク出デ、毛織物ハ、オモニ、東京ヨ
リ出ヅ。

如 造 焼物ニハ、トーキ、ジキ、土器ナドノ種類ア
リ。土器ハ、スリバチナドノ如ク、ネバ土ノミ
ニテ造リタルモノナリ。トーキトジキトハ、

粉 ホトンドニタルモノナレド、ジキハ、トーキ
ヨリカタクシテ、コレヲウテバ、金物ノ如キ
オトヲ出ス。トモニ、トー土ニ、砂ヤ石ノ粉ヲ
マゼテ造リタルモノナリ。

ジキハ、京都^{フナリ}尾張^{カガ}加賀^ガ等ヨリ多ク出デ、ト
ーキハ、磐城^{イハ}近江^キ等ヨリ多ク出ヅ。

第六課 仕立物をさいをくす
先目、おたのみ申しておきました袴が出

存儀式

来て居ましたらどうか、この使にお渡し
下さい。

願

御存じの通り、あの袴は明日の儀式に出
るために、おあつらへ申したのでありま
すゆゑ、後れましては、まことにめいわく
いたします。もし、まだ、出来て居ませんな
ら、ぜひ、明朝までに、御仕立て下さるよ
うに、御願ひ申し上げます。

返事

引届 諸 約束

御引き受け申しました御袴を、今朝まで
に仕立てて、御届け申し上げますと存
じましたが、あやにく、家内に病人が出来
ましたために、諸方よりの御註文は、一切
おことわりをして居ります。よゝな次第
ゆゑ、御約束通りに出来ませんので、まこと
に、申しわけがございませぬ。しかし、今晚

承

は、夜通し仕事をしてなりとも、明朝御出
かけ前に、きつと、御届け申し上げますか
ら、どうか、さよー、御承知下さいませ。

第七課 受取

倉帯

金山トミハ本町ノゴフク店ノ大和屋ニ
行ッテ、越後チヂミ・クルメガスリ・小倉帯ノ
三品ヲ買ヒマシタ。

圓

コノ代金ノ合計ガ、八圓九十六錢トナリ

番

マシタカラ、十圓シハイヲ出シマス。ト、大和
屋ノ番頭ハ、一圓四錢ノツリニ、次ノヨーナ
受取ヲソヘテ出シマシタ。


受取證



證壹貳參拾反

一金壹圓參拾九錢 小倉帯一すぢ
一金貳圓貳拾六錢 くるめがすり二丈二尺
一金五圓參拾壹錢 越後ちぢみ一反
合計金八圓九拾六錢

候 右  受け取り申し候

明治三十七年六月十五日 大和屋 

金山様

人カラ金錢ヲ受ケ取ル時ニハ、大テイ、受
取證ヲ、ソノ人ニ渡シマス。

付 スベテ、金錢上ノ書付ハ、後日、マチガヒノ
オコラナイヨーニセネバナリマセン。ソレ

字 エエ、金錢上ニツカフ數字ハ、一・二・三・十ト書

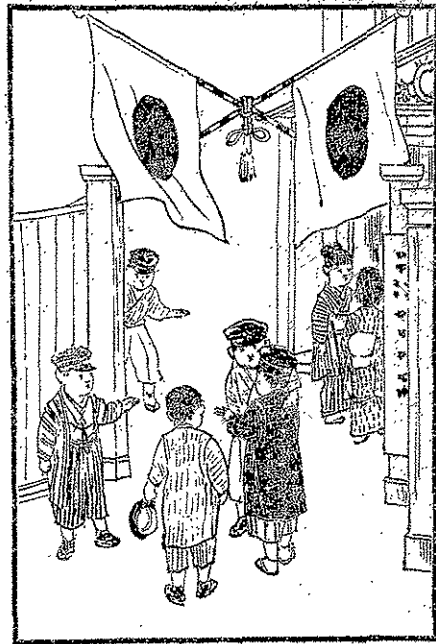
カナイデ、前ノ受取證ノヨーニ、壹・貳・參・拾ト
書キマス。

印 マタ、金高五圓以上ノ受取證ニハ、印紙ヲ
ハルコトニナツテ居マス。

レンシュー 第三



古川石太郎ハ河内屋ニテ仕
立テン袴ヲハキ、モンツキノ
羽織ヲ著テ、家ヲ出デタリ。



カレハイマ、學校ノ儀式ニ
行カントスルトコロナリ。
カノ羽織ハ手織本綿ニシ
テ、袴ハ小倉織ナリ。

第八課 オモナル國產

肥ワガ國ハ氣候ホドヨク、地味肥エテ、

何ヲウエテモヨクツダツ。

中ニモ名高キ農産ノ

一ツハ米ニテ、一ツハ茶。

茶

茶ハ山城^{ヤマシロ}ノガ品ヨクテ、

多ク出ダスハ、伊勢・駿河。

米ハ全國オシナベテ、

ホトンド産セストコロナシ。

賢

ワガ國ノ人ハ賢ク、手がキキテ、

何ヲナシテモタクミナリ。

ヒキ出ス生絲ニムラナクテ、

新編 日本書紀 卷之八 孝武天皇 二十八年 會經 音乃 令 彥 鹿

縣

仕上ゲウツクシ、白羽^{ハグタヘ}二重。

あめりか向ノ羽二重ヲ、

織リダストコロハ、福井^{フクキ}縣。

生絲ヲ多ク出ダス地ハ、

長野・福島・群馬^{グマ}縣。

ワガ國ハ、土ノ下ニモ、タカラアリ。

ホレドモツキヌ金石ノ、

中ニテオモナル國產ハ、

銅

銅石炭ノニツナリ。

石炭多クイダス地ハ、

ホロナイ・高島・三池ニテ、

銅ノ產地ノ名高キハ、

足尾^{アシビ}・別子^{ベツシ}・ヤ尾^{ヤサハ}・去澤^{サハ}。

第九課 横濱^{ヨコハマ}

横濱は、東京より南の方八里の處にあり。

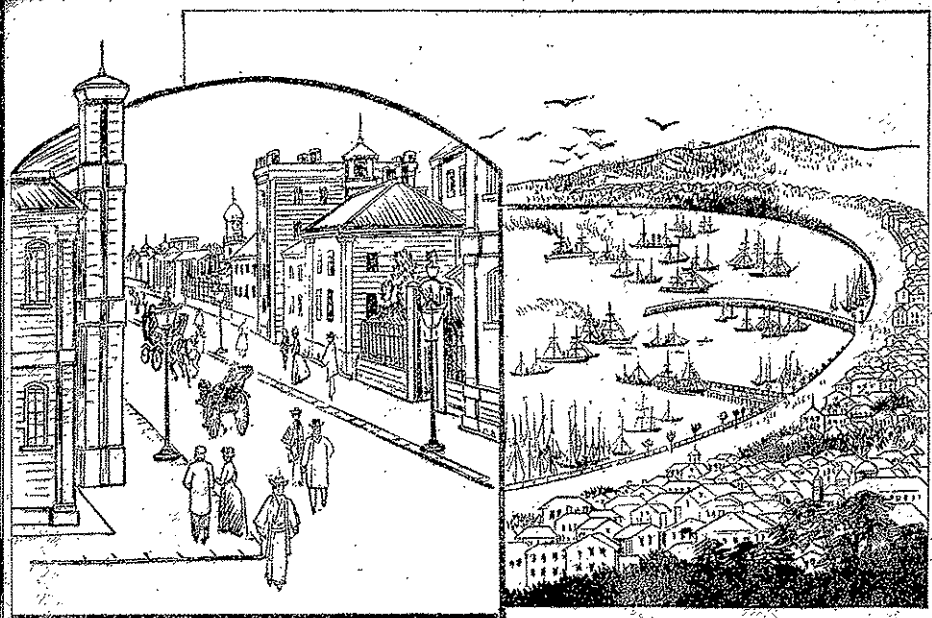
橋

新橋より、汽車にてゆけば、おほよそ一時間

新編 日本書紀 卷之八 孝武天皇 二十八年 會經 音乃 令 彥 鹿

達

港 餘



にて達すべし。

横濱はもと海邊の
一小村にして、魚や貝
をとる人のみの住み
たる處なりしが、今よ
り四十餘年前は、じめ
て、この港を開き、外國
とのぼーえきじょー

増とせしより、人口次第に増し、今は、その數、ほ
萬とんど二十萬に達したり。

横濱には、外國の領事館あり。また、外國よ

税り入り来る商品の税を取り立つる所あり。

横濱より外國に出だす產物には、生絲、絹

織物、茶、米、石炭、銅など多く、又、外國より横濱
に集り来る產物には、石油、砂糖、らしや、かな
きんなど多し。

横濱の如き、外國とぼーえきする處を開
場 港場といふ。開港場は、横濱の外に、神戸、大阪、
長崎、函館等二十餘港あり。いづれも、内外の
船、日夜出入して、たゆることなし。されど、横
濱の如くは、んじょーなる開港場は、全國中、
多く、その類を見ざるなり。

レンジャー 第四

ワガ國產ノ重ナルモノハ、生絲、絹織物、茶、米、石炭、銅
等ナリ。コレ等ハ、一タビ開港場ニ集リ、ソレヨリ、船ニ
テ、外國ヘオクリ出ダサルルナリ。

ワガ國ノ開港場ハ、二十餘リアレドモ、コトニ、ハン
ジョーナルハ、横濱ト神戸トナリ。

横濱ハ、東京ノ南八里ノトコロニアリ。四十餘年前
マデハ、サビシキ村ナリシガ、一タビ開港場トナリ
テヨリ、次第ニサカンニナリ、今ハ、人口ホトンド
二十萬ニ達シタリ。

第十課 てんかのいとつゐ

てんかのいとつゐとは、たなかつゐはちのことである。

つゐはちは、しなののくにのひとで、うまれつき、しよーばいがすきであつた。十二さいのとき、あるみせにほーこーして、たいをし、しゅじんにきにいられた。

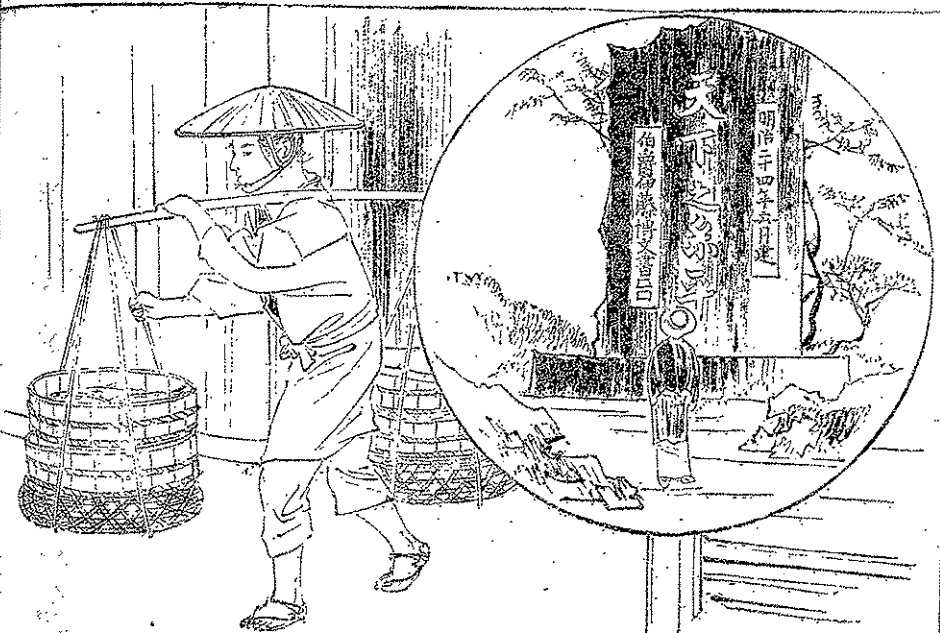
十五六さいのころには、うをうりをして、

くにぐにをあるいた。

そのころ、ちよーど、せいよーとのぼーえきがはじまつた。

つゐはちは、これをきくやいなや、あづかのもとでをもつて、きいとや、ちやのしよーばいをはじめた。

つゐはちは、たびたび、そんをしたけれど、すこしもきにかげずに、ますます、しよー



ばいをはげんだので、
 そのみせが、おひおひ、
 はんじょーしてきた。
 ついはちは、そのの
 ち、いろいろのくわい
 しゃをたてたり、きん
 こーをはじめたりし
 て、ひろく、しよーばい

をしたゆゑ、とーとー、てんがになだかいお
 ほあきうどになった。

ついはちは、五十一でしんだ。そののち、ひ
 とが、ついはちのために、おほきないしをた
 てて、「てんかのいとついで」としるした。「てんか
 のいとついで」とは、てんかになだかいとや
 のついはちといふことである。

第十一課 京都

俗 言

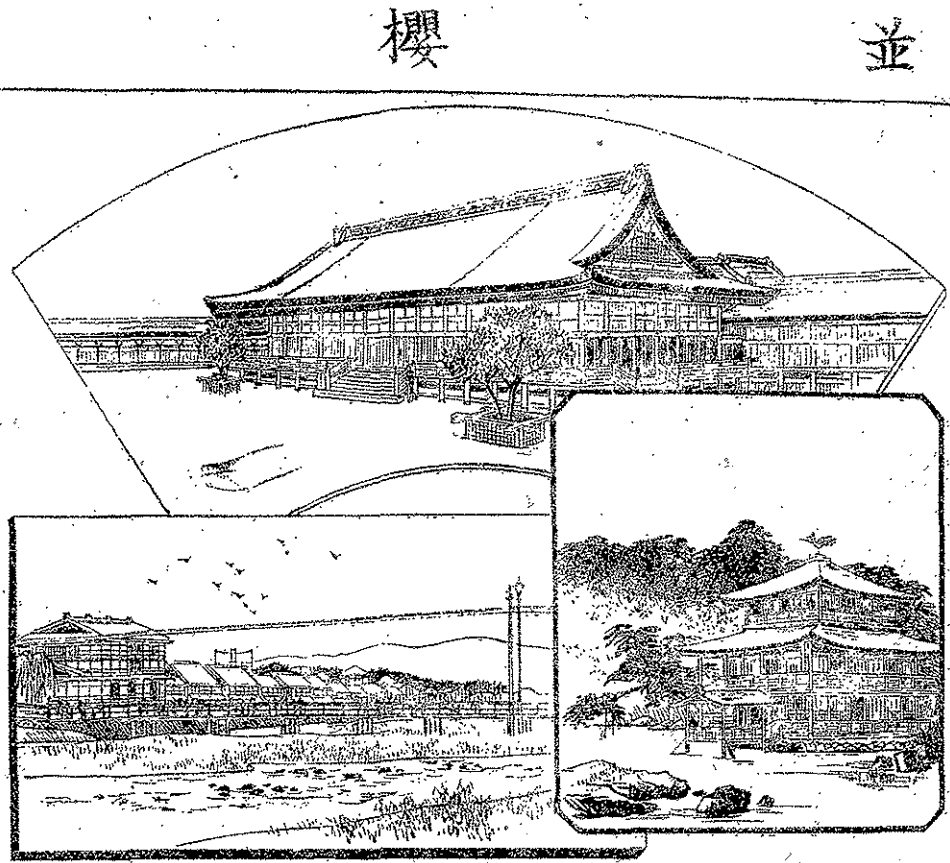
京都は、桓武天皇の都をさだめ給ひてより、明治元年に至るまで、一千餘年の間、皇居のありし處なり。その道すぢ正しく、たて物りつはにして、風俗言語もおのづから、みやびやかなり。

舊

市の内外には、名所舊跡はなほ多し。賀茂川は、市の東を流れ、川の東に東山あり。そのふもとには、名高き宮、大なる寺など、立ち

並

並べり。



この外、西山、北山にも、名所少なからず。中にも、嵐山の櫻、高雄の紅葉なども、世にあらはる。京都の商業は、

藝 東京大阪ほどにさかんならざれど、工藝は、
盛 すこぶる盛なり。その工藝品中にて西陣織ニシアンオリ
鴨川カモガハ漆清水シメキヨミヅ焼などは、とりわけ世に珍重せ
らる。

第十二課 坂上の田村麻呂

昔、桓武天皇様の御代に、坂上田村麻呂
といふえらい大將があつた。

胸 田村麻呂は、身のたけが五尺八寸、胸のあ

眼 つさが一尺二寸あつて、その眼は、たかのよ
ーにするどく、そのひげは、金のはりがねの

よーに、こ
はくあつ
た

田村麻



仰 呂は、天皇様の仰せをうけて、えぞをせい
ばつしにゆかれた。

これまで多くの將軍がたびたびえどを
うつたけれど、いつもうまくいかなかった
が、田村麻呂が將軍となつてから、えどがは
じめて平いのである。

田村麻呂は、京都にかつて後、病氣でな
くなつた。天皇様は大そしをしませられ
て、從二位^{シニキ}をお贈りあそばされた。

れんしゅー 第五

桓武天皇は、はじめて京都の地をえらびて、都を
さだめたまひしお方なり。

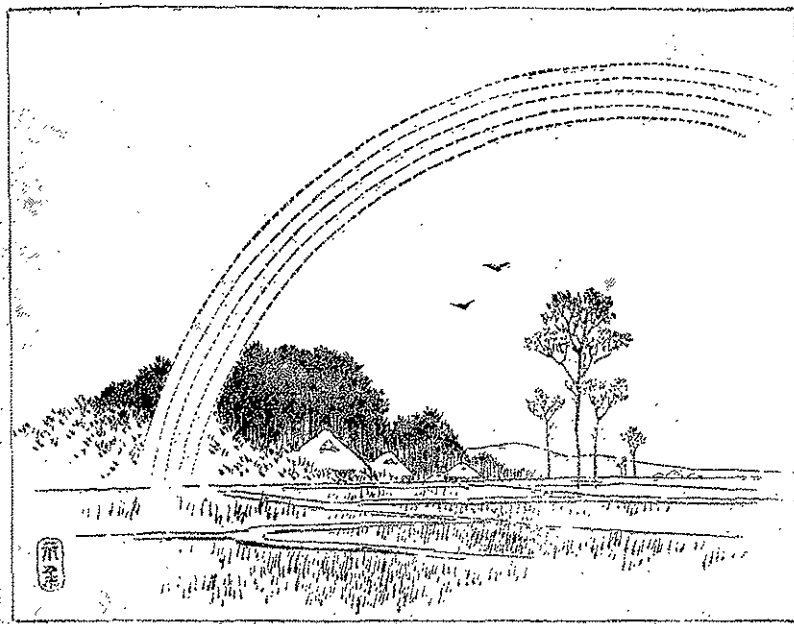
桓武天皇の御代に、えどをむきたれば、天皇は、
坂上田村麻呂をして、これをうたしめられたり。
これより、天皇の御いこは、とほき國まで及びたり。

これは、京都の名所のしやしんであります。おひま
の時、ゆるゆる御らん下さい。

御大切のしやしんを、ながながありがたうござい
ました。ただ今、使に持たせて、おかへし申し上げます。

第十三課

にじ



かのにじを見よ。
にじの形は何にに
たるか。

「そり橋ににたり。
にじの色は、いくつ
なるか。

「七つなり。」

黄緑紺紫

黄・緑・青・紺・紫なり。

君は、その七つの色を一々いひうるか。
「しかり。上よりじゅんに数ふれば、赤かば、
かのにじは、いかにして生じたるか。

「ぢめんより出でたるならん。」

いな。にじは、こまかき水球に、日光のうつ
りて、あらはれたるなり。されば、君もし、水を
口にふくみ、日をうしろにして、きをふか

ば、にじを見ることをうべし。

晴
にじは、かく、水球に、日光のうつりて生ず
るものなるゆゑ、雨の前後に多くして、晴れ
たる日には、見ることなし。

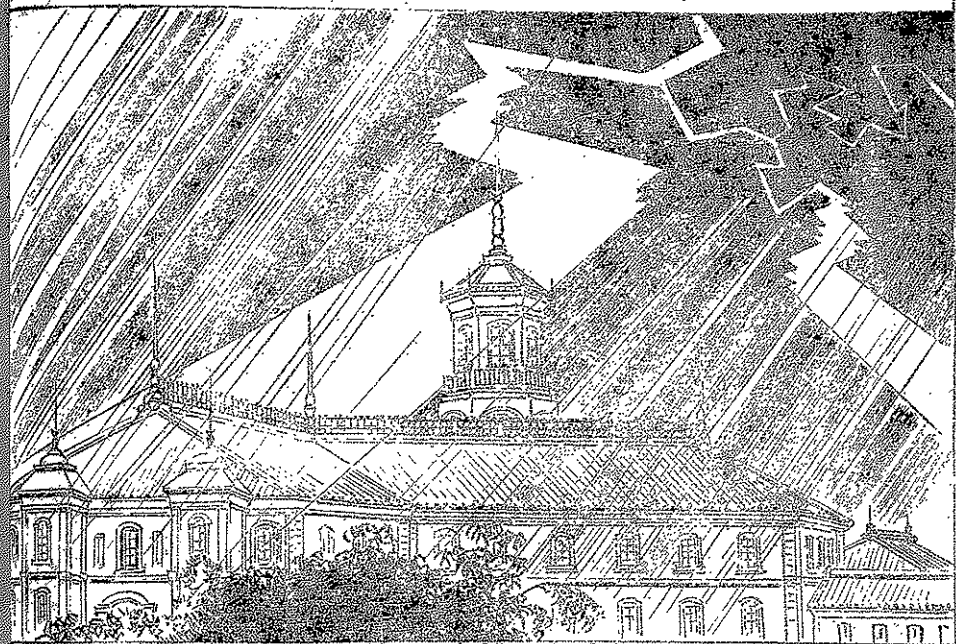
角
「にじは、常に、同じ方角にあらはるるか。」
いな。朝のにじは、西にあらはれ、夕のにじ
は、東にあらはるるなり。

第十四課 カミナリヨケ

アルガツコーデ、オホゼイノセイトガ、ウ
ンドーバニアソシデフリマシタ。

スルト、ニハカニ、ソラガクモツテ、カミナ
リガ、ハゲシクナリダシタユエ、セイトハ、オ
ソレテ、キョージョーヘニゲコミマシタ。

センセイハ、セイトタチガシンパイシテ
ラルノヲミテ、「ゴノガツコーノヤネノウヘ
ニハ、カミナリヨケガアルエエ、ケツシテ、カ



三ナリハ、オチナイ。ト
ヲシヘマシタ。

ソノトキ、アルセイ
トガ、フシギナカホヲ
シテ、ナゼデアリマス
カ。トトヒマシタ。

センセイハ、カミナ
リヨケハ、ヤネノウヘ

ニカネノハリヲタテ、ソノハリカラ、ハリガ
ネヲヒイテ、デメンニウヅメテアル。カミナ
リハ、ゴノハリガネヲツタツテ、デメンノナ
カニハヒル。ソレユエ、ヤネニオチルシンパ
イガナイノデアアル。トコタヘマシタ。

センセイハ、ナホ、セイトタチニ、タカイキ
ナドニハ、タビタビ、カミナリノオチルコト
ガアル。ソレユエ、カミナリノナルトキニハ、

ケツシテ、ソシナキノツバニ、チカヅイテハ
ナリマセン。トヨシヘマシタ。

第十五課 水のゆくへ

さきほど降ったあれほどの雨はどこへ
いったのであらうか。池のようになつた庭
先も、今ではもうあのとほりに、一しづくの
水もない。

河 降った雨は、河の水となつたのもあらう

蒸 し、地の下にしみこんだのもあらう。また、日
の熱に蒸され、水蒸氣となつて、空中にのぼつ
たのもあらう。

地の下にしみこんだ水は、どうなるであ
らうか。

それは、次第に、下の方へくだつて、地の下
を、あちらこちらと通り、そのうちまた、泉と
なつて、わき出るのである。

泉の水は、河となり、河の水は、つひに、海にはひる。それゆゑ、海や河の水も、そのもとは、みな、雨である。

海や河の水は、また、蒸されて、空中にのぼつて、雲となり、雨となる。それゆゑ、雨の水も、もとは、やはり、海や河の水である。

變

水は、かういふふーに、處を變へ、形をかへて、つねに、天地の間をめぐつて居るのである。けつして、一しづくでも、なくなるものではない。

レンシュー 第六

今日ハ、天氣デ、心モチガヨイ。草ヤ木ノ葉ノ綠色ハ、トリワケ、深クミエル。

アレ、向ウニ、何カ、チラチラトノボルヨーニ見エル。アレハ、何デアラウカ。

アレハ、地面ノ水ガ、太陽ノ熱ニ蒸サレテ、ノボルノデアル。コレヲ水蒸氣トイフ。

第十六課 めくらむすめの裁縫

兩 昔、大和國に、しかといへるむすめありた
り。ほーそーをやみて、兩眼ともにつぶれた
り。そのころは、もーあ學校などいふものも
なかりしゆゑ、その父も、むすめの身をいか
にせんかと、つねに、心配して居たり。

習 しかは、つくづく思ふよーよそのむすめ
たちは、みな、裁縫などを習へるに、われのみ

倍 は、めくらにて、じゅば
ん一枚も縫ふことあ
たはず。いかに、ふしあ
はせなる身の上なる
ぞ。されど、裁縫は、おも
に、手にてするわざゆ
ゑ、人の百倍も骨をを
らば、われにも、出来ざ



時計のはりのたえまなく、

めぐるがごとくときのまの、

ひかげをしみてはげみなば、

いかなるわざかならざらん。

レンシュー 第七

皇后陛下ハ我等ニ學問ヲススメ給ハントノオボ
シメシニテ、金剛石ノ御歌ヲ下シタマハリタリ。

コノ御歌ニテ示サセタマフゴトク、ヲサナキトキ
ヨリ、怠ラズ勉強セバイカナルコトニテモ、ナラザ
ルコトナカルベシ。

シカトイヘル女ガ、メクラニテアリナガラ、裁縫ニ
上達セシモ、マタ、一心ニソノワザヲ勉強シタレバナリ。

第十八課

鶉越ヒヨドリゴエのさか落し

昔、攝津セツの一の谷といふところで源氏と
平家ヘイケの大いくさがあつた。

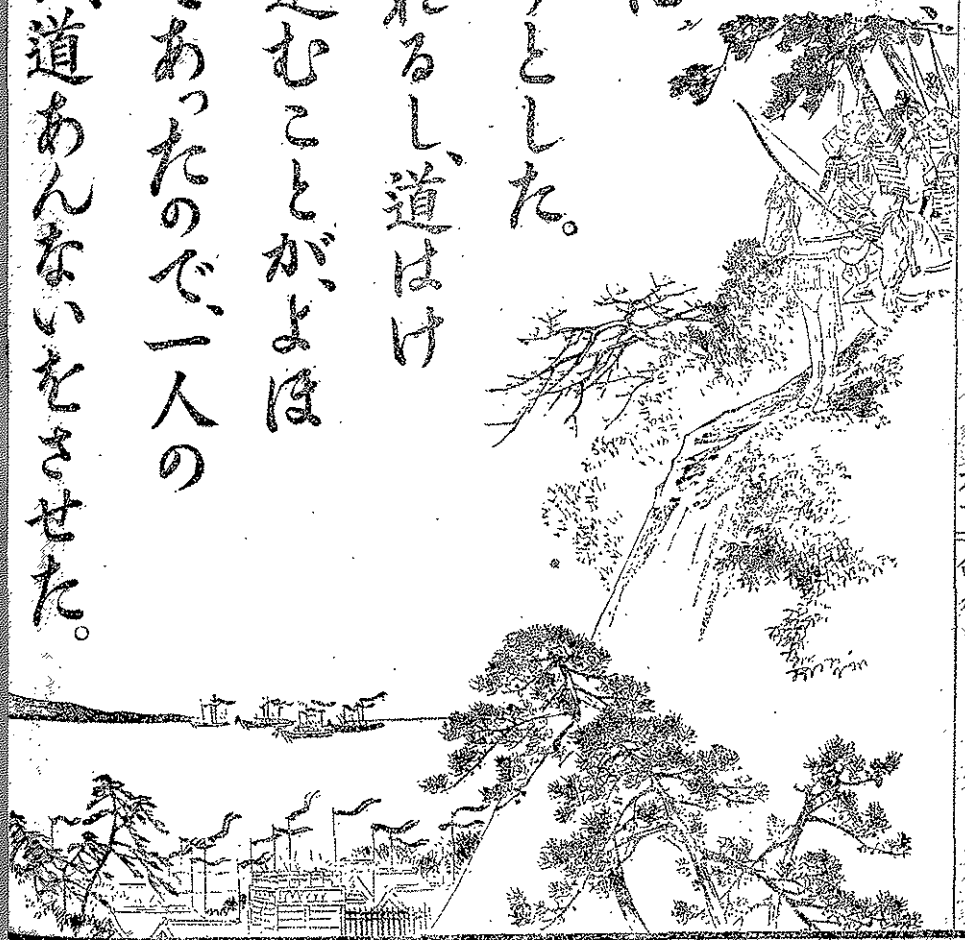
この時、源氏の大將源義經ミナモトノヨシツネは、三千の兵を

ひきつれて
鶉越から一
の谷の城に
うち入らうとした。

暮 日は暮れるし、道はけ
はしいし、進むことがよほ
どなんぎであつたので、一人の
かりうどに、道あんないをさせた。

かりうどは、「鶉越は、とても馬で越される
處ではありません。ここを越すものは、しか
ばかりでございます。」と申しあげた。

義経は、これを聞いて、しかも四足である
し、馬も四足である。しかが越えるところを、
馬が越えられぬはずはない。といひながら、
馬にむちうつて、夜あけごろに、一の谷のま
うへまですすんだ。



下の方を見おろすと、敵の軍せいは、城の中にみちみちて、さきに前の方からせめこんだみかたの軍せいと、合戦のまっ最中であった。

急
義経は、かべのよーに急な坂を物ともせず、馬をおとして、まっ先に、城のうしろへ下った。

劣
三千の兵も、われ劣らじと、馬ををどらせて、とび下つて、どつと、ときの聲をあげて、せめかけた。

平家の軍勢は、前後に敵をうけたものだから、うろたへさあい、で、さんざんにうちやぶられた。

第十九課 神戸牛

肉 牛
ワガ國デハ、コレマデ、アマリ、肉食ヲシナ
カッタメニ、牛ヲカフ人ハ、ミナ、ソレニ、車

荷ヲヒカセタリ、荷ヲオハセタリスルコトバ
カリヲ、目アテニシタノデアル。

シカルニ、今デハ、肉ヲ食フコトニナツタ
タメ、牛ヲカフ處ノフエタコトハ、實ニ、非常

ナモノデアル。トリワケ、山陰、山陽兩道ノ國
牧國ニハ、牧牛場ガ、ハナハダ多イ。

コレヲノ牧牛場カラ出ル牛ハ、大テイ、神
戸ニ集ツテ、ソレカラ、諸方ヘ出デユクエ、

オシナベテ、神戸牛トイハレテ居ル。

牛肉ノクワンヅメヲ買ツテ見ルト、神戸

名産ト書イテアルノガ多イ。ソレヲ見テモ、

牛ハ、神戸ノ名物デアルコトガワカル。

神戸ト東京ノ間ハ、ズイブン遠イケレド、

汽車トイフ便利ナモノガアルタメニ、昨日

マデ、神戸ノ屠牛場ニ飼ハレテ居タ牛モ、今

日ハ、モハヤ、東京ノ牛舎ニツナガレル。サウ

屠飼舎

シテ明日ニナルト、市中所々ノ店先ニ出サ
レテ神戸ノ上等牛肉トイハレル。

第二十課 養生をすすむ

御病氣は、近頃よほどおよろしい御よ
すで、おめでたうぞんじます。

御全快までは、せひ御服藥が御大切でござ
いますか、せんたい、御弱いおからだで
いらつしゃいますから、御養生のために、少

頃 藥 弱

しづつ、牛乳をめし上られましては、いか
がでございますか、ちよつと、御すすめ申
し上げます。

乳

八月二十五日

中村しげ

大山夏様

返事

御深切な御手紙を下さいまして、ありが
たうぞんじます。かねがね、牛乳は、養生に

好

なると聞いて居りましたが、あまり好み
ませんために、今まで用ゐなかつたので
ございます。しかし、せうかくの御すすめ
でございますゆゑ、明日から、少しづつ、用
ゐて見たいと申し上げます。

八月二十六日

大山夏

中村しげ様

第二十一課

日本三景

陸前の松島、丹後の天の橋立、安藝の嚴島
をあはせて、日本三景といふ。

經

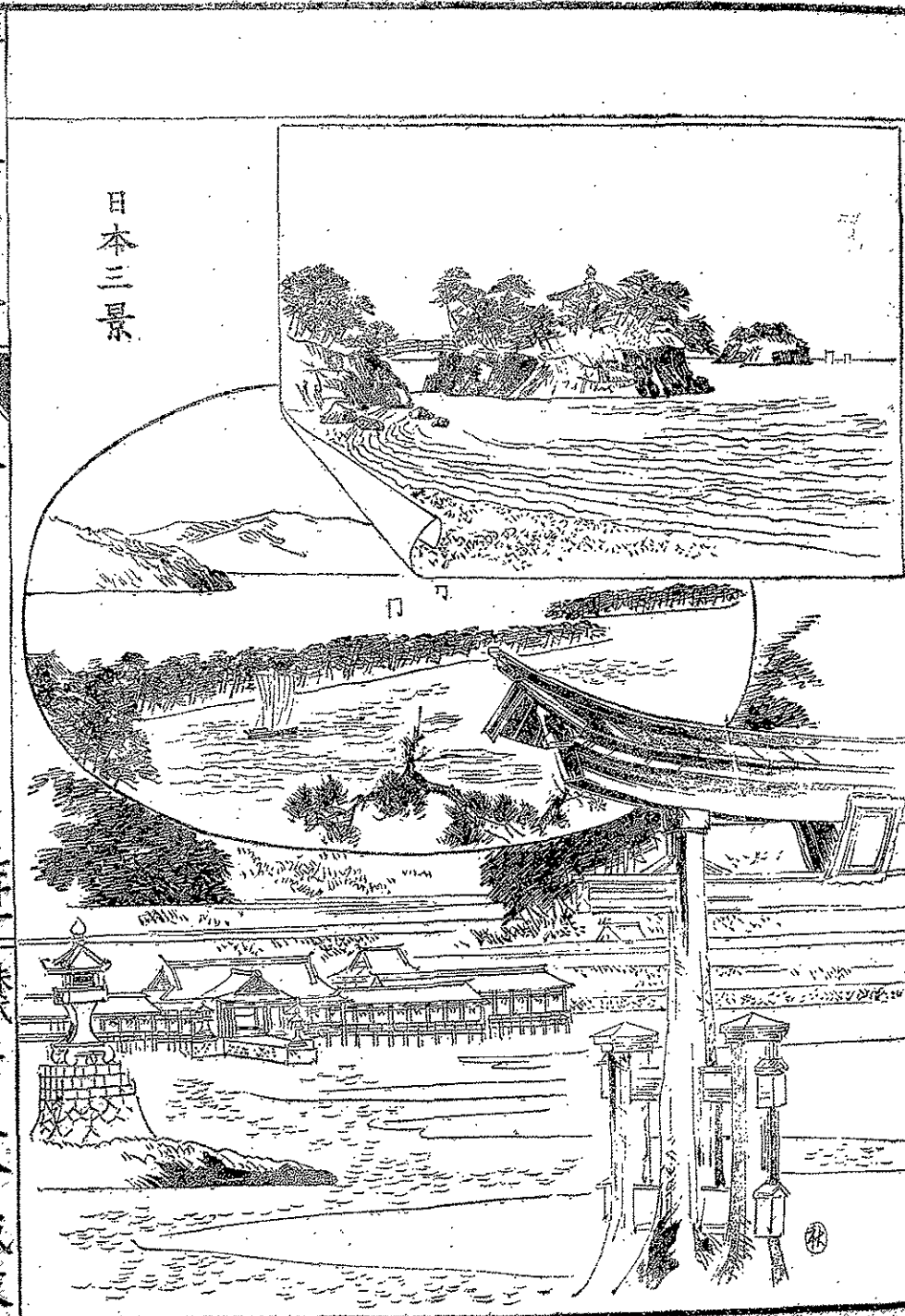
松島は、陸前の國松島灣にあり。灣内に、大
小數百の島ありて、年を経たる松その上に
生ひしげり、景色のよきこと、名もおよびが
たし。

天の橋立は、丹後の國よさの海にあり。一
すぢの白き砂地、ほそ長く海中につき出で、

茂 青松その上に茂りあひ、波の上に、長き橋を
かけたるが如し。

沖 樹 潮

嚴島は、安藝の國廣島沖にあり。全島ほと
んど山にして、樹木生ひ茂れり。島の北岸に
は、名高き嚴島神社あり。潮みつる時は、鳥居
も御殿も、水の上にうかぶるがごとくに、
あたかも、りゅうぐーかと思はるるばかり
なり。



日本三景

幸

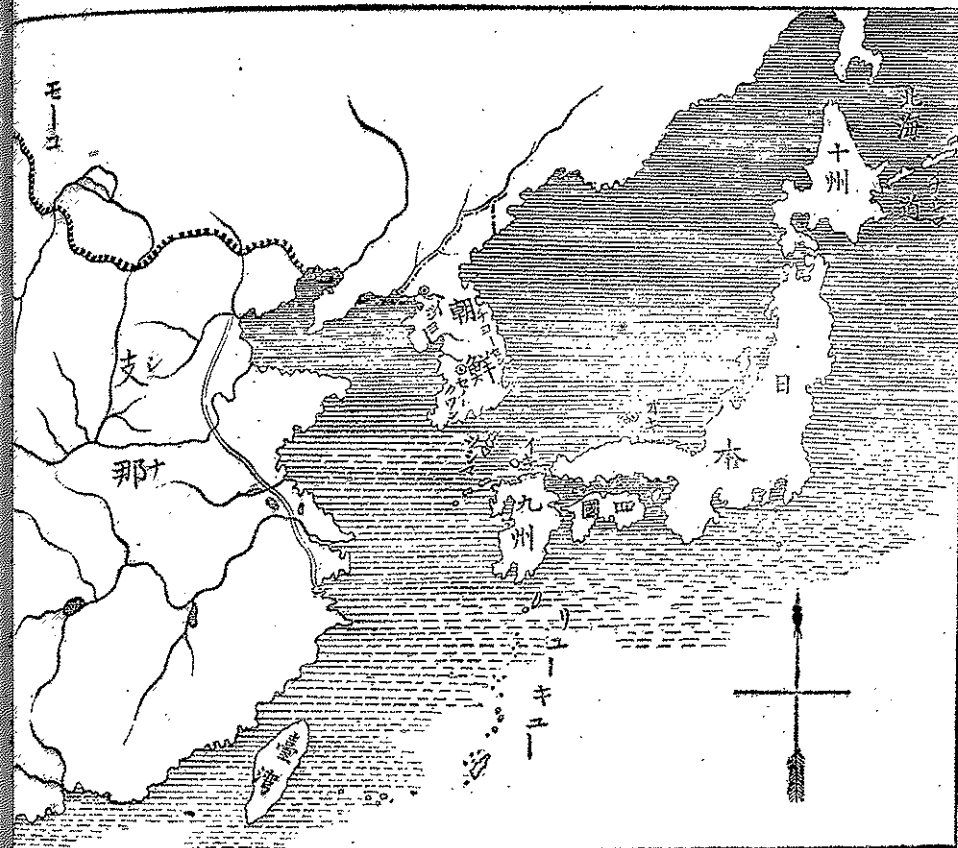
サレド、幸ニ、ワガ國ハ海國デアルカラ、隣國トハイフモノハ、ミナ、海ヲヘダテテ居ル。昔カラ、朝鮮ヤ支那ニ何事ガアツテモ、ワガ國ニハ、少シモ、サシヒビキガナカッタ。ソレトイフノモ、一ツハ、カヨ―ニ、海デ、國ト國トガヘダテラレテ居タカラデアル。

底

船ガアルシ、事ヲ通ズルニハ、海ノ底ニ引イシカシ、今日トナツテハ、海ヲ渡ルニハ、汽タ電信ガアルカラ、事ヲシルコトモ早く、人ノユキ來モ、シゲクナッタ。シテ見ルト、今デハ、昔ノヨ―ニ、安心ハ出來ナイ。

同シ外國ノ中デモ、右ノ二國ハ、ワガ國ニ大切ナ國デアル。コトニ、朝鮮ハ、ワガ國ノ對馬カラ、海上ワヅカ十餘里ノ處ニアツテ、ワガ國ノ人モ、大分住ンデ居ルシ、ボーエキモ、久シイ前カラヤツテ居ル。

貿易



支那ハヤヤ
遠イ隣國デア
ルガ、何シロ、東
洋デノ大國デ、
人モ多イシ、産
物モ多イ。マタ、
ワガ國トノ貿易
高モ、朝鮮ヨ

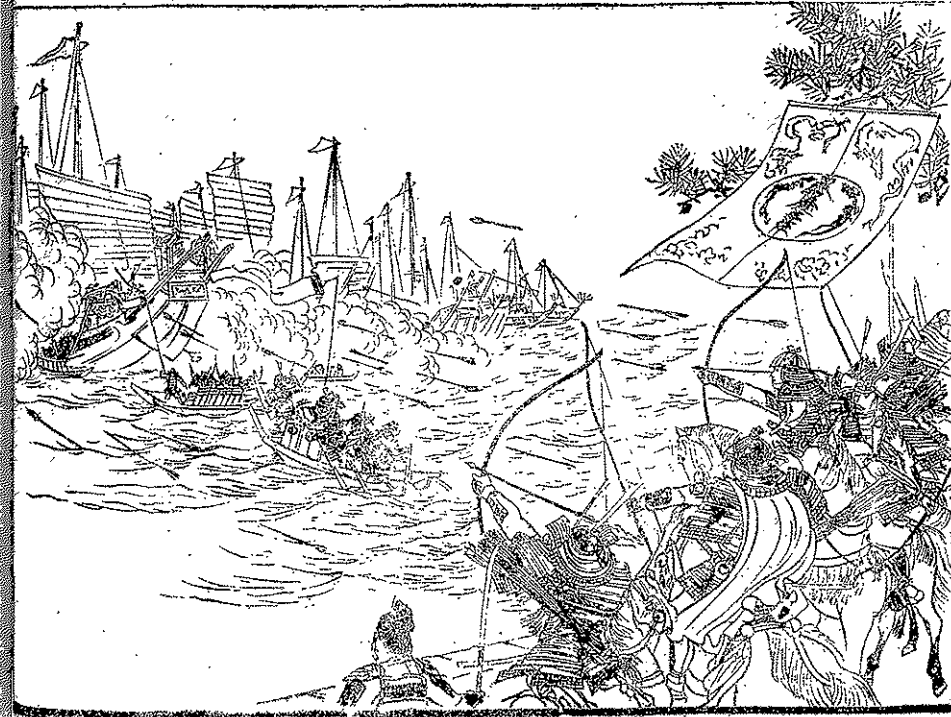
リハ多イ。

日本・支那・朝鮮ノ三國ハトモドモニカヲ
合セテ、東洋ノ富強ヲハカラネバナラン國
デアル。

第二十三課 もーこ来る

もーこは、支那の北にある國である。その
王クブライは、支那全國をみな取つてしま
つて、國を元と名づけた。

クブライは日本が近所^{きんじよ}にありながら従^{したが}はないのを怒^{いら}つて、大軍をおこして、攻めて来た。来たとも来たとも、三萬艘の大軍を、九百艘の船で、おくつて来た。



この時、鎌倉^{かまがら}の執權^{しつけん}の北條時宗^{ほくじょうときむね}は、ちつともおそれず、にどしどし、兵を九州に出した。賊は、まづ、對馬に來た。つぎに、壹岐^{いっき}に來た。つぎに、肥前の島々に來た。しまひに、筑前^{ちくぜん}の博多^{はつかた}に來た。

防 わが兵は、いつも、ひつしとなつて防いだので、賊は、とてもかなはないと思つたのか、一たんに、げて歸つた。

まもなく、賊は十萬の大軍で攻めて來た。壹岐對馬を取つて、博多にやつて來た。二日の間、大いくさをしたが、賊はとーとーまけて、肥前ヒゼンの鷹島タカシマに引きあげた。

暴

その時にはかに暴風雨がおこつて、賊の船はみなひっくりかへつた。

わが兵は、勇み進んで、はげしく、これを攻めた。賊はほとんど死につくして、國に

かへつたものは、ただ三人であつた。

クブライも、「日本のよーな強い國には、とてもかなはない。」とあきらめたと見えて、その後、もう、攻めてこなかつた。

れんしゅー 第九

ここにゑがいてあるのは、支那人と朝鮮人である。頭のまはりをつて、頂に、少しばかりのかみをのこし、これをあんで、長く後にたらしめて居るのは、支



那人である。



黒い大きなぼしをかう
むり、白い衣服を著て、手に
長いきせるを持って居る
のは、朝鮮人である。

の隣國であつて、この二國の人は顔の色から形
まで、大を、わが國の人にてゐるが、風俗や言

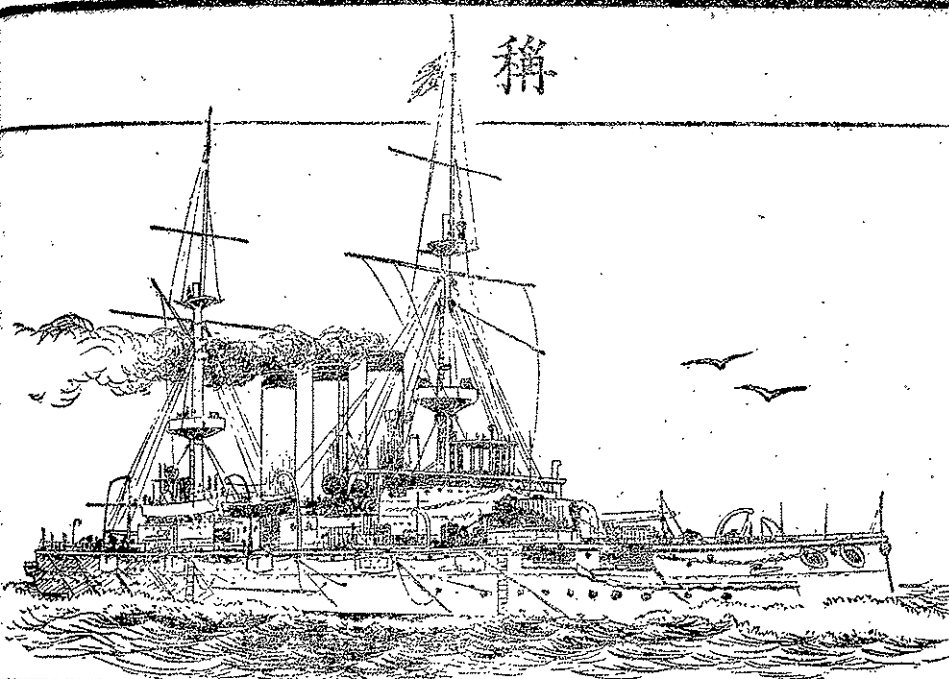
語は、まるで、わが國の人とちがふ。

第二十四課 軍艦ト砲臺

艦 畫

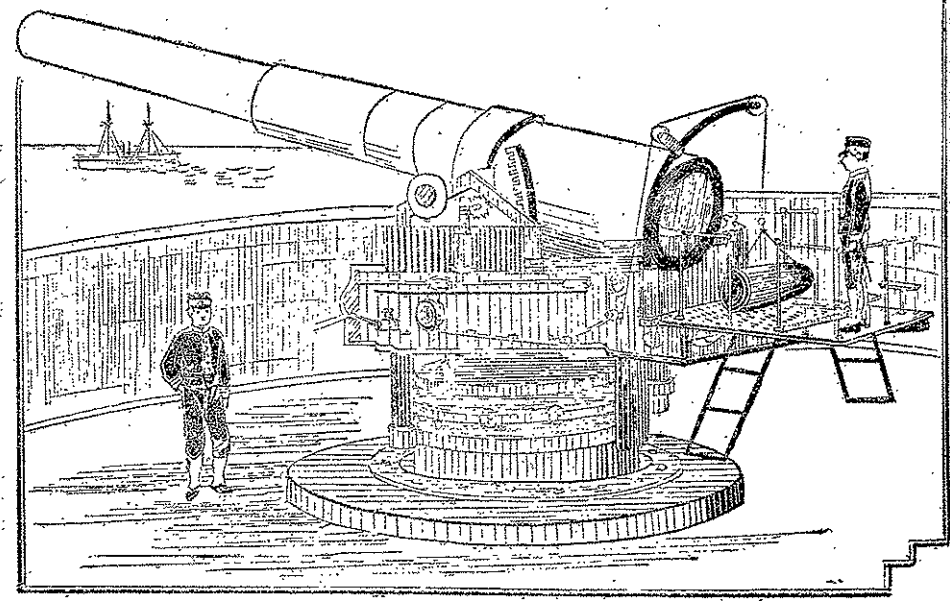
突

ココニ、ニツノエアリ。始メニ畫キタルハ、
軍艦ナリ、黒烟ヲマキアゲ、怒レル波ヲケヤ
フリテ、突キ進メルサマノ勇マシサヨ。
コレハ、イツコノ軍艦ナルカ。
コレハ、ワガ國ノ軍艦ナリ。高く、日ノ丸ノ
軍艦旗ヲアゲタルヲ見テ知ルベシ。



コレハ、何艦ナルカ。
 敷島艦ナリ。敷島艦ハ
 三笠^{ミカサ}、初瀬^{ハツセ}、朝日^{アサヒ}、富士^{フジ}、八島
 トトモニ、ワガ國ノ六大
 艦ト稱セラル。
 ワガ國ノ軍艦ハ、コノ
 外ナホ、アマタアリテ、ソ
 ノ數ホトンド、六十ソー

ニ達セリ。
 ココニ畫キタルハ、
 砲臺ナリ。砲臺ニハ、敵
 艦ヲ防ガンガタメニ、
 多クノ大砲ヲソナヘ
 タリ。傍ニ立テル人ノ
 大サニヨリテ、大砲ノ
 考大サヲ考ヘ見ルベシ。



ワガ國ニテ、東京灣キダシノカキ・紀淡海峽キダシノカキ・馬關海峽バカン對
要 馬等ノゴトキハ、要害ノ地ナレバ、ソコニハ、
設 ソレゾレ、砲臺ノ設ケアリ。

第二十五課 朝日のみはた

朝日のみはた。朝日のみはた。
うしほの風にひるがふり、
ほばしらたかくかかりては、
今ぞ日の出のみ國のさまを、

示

とつくにぐににさし示す。
げにもたふとき、朝日のみはた。
朝日のみはた。朝日のみはた。
千軍萬馬をみちびきて、
陣頭たかくなびきては、
かがやくきみのみいつの光を
てきのやからにさし示す。
げにもたふとき、朝日のみはた。

陣

新編國語讀本 尋常科 八年二會社 普及舎 痛庵

朝日のみはた。朝日のみはた。
わが國民の祝ひ日に、
家のかどなみならびては、
民のけがれぬ心の色を、
みそらに高くさし示す。
げにもたふとき朝日のみはた。

をばり

明治三十四年六月廿五日印
同 年六月廿八日發行
明治三十四年八月四日訂正再版印刷
同 年八月八日訂正再版發行

新編國語讀本尋常科

定價		價		
甲種	卷一	八錢	卷五	十二錢
乙種	卷一	九錢	卷六	十二錢
卷二	十錢	卷七	十三錢	
卷三	十一錢	卷八	十四錢	
卷四	十一錢			
合計		金九十九錢		

明治三十四年八月十六日
文部省檢定濟



發賣所

帝國書籍株式會社

東京市神田區南乗物町十番地

著者 小山 左文二
著者 武島 又次郎
發行者 株式會社普及舎
代表者 山田 禎三郎
右社長

